

施設園芸事業を支えた3年間



施設園芸の事務全般のほか、ハウスに出向いて栽培などの作業も行った。



施設園芸だけでなく「味覚まるごとフェア」への参加や「紡ぐ時代」のインタビューなど様々な仕事に携わった。



Q. 猿払村での思い出は？

自分の中に何となくあった田舎暮らしを満喫できたことです。村での生活で車を所有しなかったため、おのずと生活圏は狭くなるのですが、自分の足で行ける範囲で生活することで、何となくですが地域の特性を感じられたと思います。特に自転車が趣味なため、信号がほとんどない村での生活は最高で、エサヌカ線でのサイクリングは、時に風に苦しめられ、時に風に助けられながら、自然の中を走りぬけるというサイクリングの醍醐味を感じることができました。

Q. 仕事で楽しかったこと、苦勞したことは？

主に携わってきた施設園芸栽培調査研究事業が一番楽しかったことは、事業の立上げに参加できたことです。これは同時に最も苦勞したこともありません。派遣になった3年前には、IoTを活用しハウス内でイチゴを育てることは決まっていたのですが、どんな設備が必要なのかや、どんな品種を栽培するのかなどまだ決まっていなかったことも多くありました。そのような部分について、みんなで知恵を絞りながらなんとか形にできたことが苦勞しながらも楽しかったし、なによりやりがいもあつた点です。

村民のみなさんへ

3年間という長いようで短い期間でしたが、村の人間の一人として受け入れていただきありがとうございます。この3年間の経験は、道職員としても、一人の人間としても、大きな経験となりました。道職員としては、今後も北海道内を飛び回ることにありますので、どこかで見かけたら、元気にやっつるんだなと思ってもらえると幸いです。



なかだ てつよし
中田 哲吉

平成30年度に北海道庁からIoT推進事業の職員として猿払村に派遣。主に施設園芸栽培調査研究事業に携わった。令和2年度をもって派遣期間満了となった。

Q. 赴任前・住んでからの猿払村のイメージは？

猿払村のことは、名称以外全くといっていいほど知りませんでした。猿払村という村名も大学の授業で知っただけで、異動先が猿払村だと言われて初めて、どこにあるのだろうと地図を調べたくらいです。

そのような状態でしたので、猿払のイメージは全く浮かばず、宗谷総合振興局管内ということで夏は涼しそうだろうとか、きつと雪深いのだろうと考えていました。また、当時の上司が以前水産林務部で働いていたこともあり、猿払のホタテは有名だと教えてくれていました。

まとめると、私の猿払村に対するイメージは、①北にあって、②冷涼な気候で、③雪深く、④ホタテが名産ということになります。実際に住んでみると環境面では、夏は涼しくて住みやすく、雪は思っていたほど多くなかったため、総じて住みやすい場所だと思います。もつとも、雪については、

私が南国の生まれで、雪に対する憧れを子供のころから抱いていたため、そのように感じているのかもしれません。

また、今まで、故郷の宮崎や幼少の頃を過ごした大阪、学生時代を過ごした京都、札幌といった都市部と比較して、人との関係に温かみを感じました。村に来たばかりのころなどに、多くの人に声をかけていただき、なんとなくですが人と人とのつながりがあるのだなと感じたことが懐かしいです。

最後に、ホタテですが、これには度肝を抜かれました。元々、札幌に来るまでホタテを食べたことはほとんどなかったのですが、札幌で食べたホタテがおいしくて、好物のひとつとなっていました。……が、うち(猿払)のホタテは一味違うと言われて食べたホタテに衝撃を受けました。今まで食べていたホタテとは全く違うものを食べているのではないかと感じたことを鮮明に覚えています。